

自給飼料による

酪農経営の合理化

北 郷 繁 雄

自給飼料研究の動機

私が農業を始めたのは、父が外地より復員した昭和二十一年八月からであります。家族一同全くの未経験で、経営技術は勿論、栽培技術も皆無の状態、附近の農家のまねごとに懸命の一年でありました。

この間機会ある毎に指導をうけ自らも勉強し、強い刺戟を求めて農業を営む中に、戦時戦後を通じての掠奪農法により荒廢した地方をなんとか挽回したい、また畜力利用、現金収入の増加、生活改善、台風対策など家族一同で検討の末、昭和二十三年乳牛を購入して現在の酪農経営の第一歩を踏んだ次第です。

酪農を営む中に特に感じたことは、私達が乳牛飼育を始めた昭和二十三年ころの購入飼料価格と、現在の価格とを比較して、年々価格上昇の傾向にあるにもかかわらず、乳価は依然として六年前の状態、却つて価格低下の気運にあるということです。

そこでいかにして牛乳の生産コストを下げるかという問題に直面したわけですが、このような情勢下において

「酪農解決の鍵は自給飼料の生産にある」ことを痛感し自給飼料の研究に取り組んだ次第です。

経営規模

私の家は両親と妹の四人家族で労働力は成人換算二・四人となっております。経営面積は田畑一町一反、山林二町歩。家畜は乳牛五頭、鶏三六羽となっております。

飼料計画

乳牛A、B、C、D、E号のそれぞれの年齢に応じ年間飼料必要量を、可消化粗蛋白質と澱粉価を以て算出いたしました。

私達が飼料計画に当り、一番先に考慮を要することは体重測定であります。私は胸囲と体長より算出するフローヴァイン氏の簡易体重測定表を用いて算出したこの体重により成年A、B号は維持飼料と泌乳量により生産飼料を、なお育成中のC、D、E号は体重が逐次増加いたしますので、ケルネル氏の積の飼料標準により月別給与量を算

定し、このようにして年間飼料必要量を算出いたしましたところ年間合計蛋白一四六貫、澱粉価九三三貫を必要とすることがわかつたのであります。

すなわち私の飼料計画はこの飼料をいかに確保し、自給及び購入をいかに按分するかに焦点をおいたわけでありました。

そこで私は必要飼料の七割の自給を目標として飼料作物の栽培に移つたわけでありました。すなわち蛋白一〇二貫、澱粉価六五三貫の生産を目標としたわけですが、このような計画の下に一年を乳牛とともに生きることを唯一のたのしみとし、良きも悪きも記帳に移し続けて来ました。面積は野草と水稻の面積を除いて延面積(畑作の副産物の採集面積も含む)九反五畝、その生草収量は八・七一〇貫となつたのであります。この成分は、蛋白八五九貫と澱粉価七一二・五貫であります。私はこの生草の各月の生産を如何に調節するか最も苦心いたしました。冬季の生産がやや不足するように思いますが、この時期には、ダイコン、カンラン、青刈燕麦の外にカンシヨづるサイレンジを給与しました。

更に今後のために私の栽培した各飼料作物の養分収量を反当りて換算比較して見ましたが蛋白質においては何といたつても苜蓿作物が筆頭でレンジ、青刈大豆、秋まきカンラン、青刈エンバクの順で他は大同小異であります。

澱粉価においては青刈燕麦、カンシヨ床跡のつる、青刈トウモロコシ、パールミレットの順となつております。更に検討すべきはカンラン、ダイコン、カンシヨ、ラッ

カセイのようないわゆる兼用作物でありませんが、これらの下葉或は茎葉等の飼料として利用し得る養分も相当量であつて、酪農経営の妙味は実にはこのようなところにあるように思われます。

さて私の自給飼料の生産計画の結果を見ますと蛋白質は計画の一〇二貫に対し八五・九貫の生産で一六貫不足しております。次に澱粉価の自給は六五三貫の計画に対し計画よりも更に五九貫多く生産給与しております。

ここで購入飼料について説明いたしますと、麩、麦糠、亜麻仁粕、尿素等約五百貫であります。この成分は蛋白質六九・八貫、澱粉価二二三・四貫となつております。

さらに自給飼料について見るに澱粉価においては計画以上の実績を挙げたが、蛋白質においては計画の一〇二貫不足しております。初年度の設計のことはいえ、酪農経営を左右する最も大切な要素である蛋白質が不足したことは何といつても残念なことでありました。

今後は水田裏作における飼料作物の増反、畑地輪作の改善、苜蓿作物特に蛋白含量の多い作物の増産、尿素の合理的給与等によつて飼料自給の問題を解決していきたいと思つております。

この問題を解決することが、結局日本酪農発展への道なのであります。

(この記事は宮崎県北諸県郡中郷村上山之耕種研究会の北郷繁雄さんの研究発表の要約であります。日本の酪農発展の鍵を短期間に把握されて、正しい基礎の上に立脚し着実に成果を挙げておられる同氏に深く敬意を表します。編集部)